

◆基調講演

「関西の魅力を再認識する」

財団法人大阪21世紀協会
理事長 堀井 良殷 氏

(司会)

一堀井理事長は、NHKニューヨーク特派員、それから大阪放送局長、東京本部の理事などを歴任されたのちに、平成11年より大阪21世紀協会の理事長を務められています。NHK在職中には、テレビドキュメンタリー部門では、数多くの権威ある賞を受賞されております。現在は大阪文化祭賞選考委員会会長、関西経済同友会大阪新生推進部会、水都大阪推進委員会の共同委員長、社団法人進学明星社理事長なども兼務されておられます。また、関西大阪の文化、あるいは歴史にもご造詣が非常に深く、著書の「浪速大阪 興亡記だから元気を出さない」と等々、多数ございます。それでは、よろしくお願いいたします。

大阪ブランド

本日、お招きをいただきましてありがとうございます。この3—4年間、取り組んでまいりました大阪ブランドの話を中心に、問題提起のつもりでお話をさせていただきます。話の展開が大阪中心になることをお許しいただきたいと思います。

ブランドという言葉は最近、流行りになっているのですが、青森のりんごとか、神戸ビーフ、山形のサクラソノボなどが地域ブランドといわれています。ルイヴィトンもブランドですが、われわれが大阪のブランドを少し考えようと取り組んだのは、じつはすこし違う意味合いがあります。

「大阪は、いいところがいっぱいあるにもかかわらず、とかく、よく言われたい」という問題提起が関西経済

同友会でありました。「なぜ、大阪はかくも悪く言われるのか」ということが、じつは問題意識の発端です。海外で、大阪が、どのように取り上げられているか、各国の観光ガイドブックを英語、フランス語、中国語、韓国語、それぞれ念のために調べてみよう、と、100冊取りよせて分析をしました。それでがっかりしたのですが、「大阪は日本でも有名なヤクザの本拠地である」と書いてあるのです。これウソですね。本拠地は大阪じゃありません。ご丁寧に刺青の背中の写真が、左ページにありまして、右ページに手の写真が写っていて小指がないんです。これが観光ガイドブックですよ。ところが各国語版殆ど全部、同じ内容です。それでわかりました。これは彼ら外国人が書いているのではない。誰か日本人が書いて、そのコピーを各出版社が、次つぎにコピーしたに違いない。大阪の人や関西の人が、そんな悪口を書きませんから、たぶん、これは関東の人じゃないかなと疑っているわけです(笑)。いずれにしても、こんなことを言われていて、黙っているわけにはいかない。ところが翻って、大阪って、どういう良いところがあるのですか、と聞かれて自信をもってきっちり言えるのか、ということです。良いところ、魅力をきちっと語れるのか。たこ焼き、お笑い、タイガース。みんな大阪の本質を突いています、それだけなのかというと、決してそうじゃない筈です。われわれは3年間、大阪の魅力を掘りだそうと研究会をつくり、17項目にわたって深掘りをしてみたんです。そうすると、じつに大阪というのは、すごい魅力、すごいポテンシャル、可能性が沢山あるのです。こうしたストーリーを自覚しなければいけないし、それを人にも語っていかねばいけない。そうでなければ観光客だって来ません。投資だって、企業が、大阪に投資しようとしてもイメージの悪いところには二の足を踏むでしょう。

私は大阪は尊敬される町にならなければならないと思います。世界都市の条件は、都市の品格にあります。いま品格という言葉が流行っていますが、人に人格があるがごとく、都市にも品格が必要だと思います。それには自信を持って自らを語っていくことが必要だと思うのです。

コア・アイデンティティ

私たちが参考にしたのは、イギリスのクール・ブリタニア運動です。

とかくイギリスは、老大国で、頑固で、動きが鈍くて、物事がやりにくくて、飯がまずくて、そういう国と思われるがちであるが、どうして、どうして、イギリスというのは、もっともっとカッコいい最先端の住みよい国なのだという運動です。サッチャーさんから、ブレアさんにかけてやった。これを一つの参考にした。

そこで一番大事なのは、コア・アイデンティティです。「われわれは、いったい何者なのか？」みんなで衆知を集め、議論をしまして、4つのコア・アイデンティティを抽出したわけです。

第1は、PLACE OF ENCOUNTER 巡り合いと交差集積の場、大阪はいろんな出会いがあるまち。出会い遭遇が集積する場所。

第2は、INNOVATIVE LAND 創造と進取の地。

異文化が遭遇し衝突しエネルギーが生まれる、つまり創造が生まれるところ。

第3は、LIVING HERITAGE 歴史が躍動する複合文化都市。

出会いと創造が積み重なって歴史がつくられ、その長い歴史の中に文化が幾層にも織り込まれている都市。

第4は、ACTIVE HUMANITY 人間らしく生きるまち。

そこに生き生きと、人間が人間らしく生きるまちであり、ホスピタリティあふれるまちなのだ、というストーリーをつくりました。

ほんとうの大阪の突き詰めた根っこにあるもの。そのコア・アイデンティティが今、大阪が誇りうる17の分野の、すべてのベースに共通してあるということも検証いたしました。

そのうちの、きょうは、このPREXと関係ありそうだと思う「モノづくり」のビデオを、見ていただきます。

ビデオ放映：

大阪ブランド資源映像集「ものづくり中小企業集積」
(大阪ブランドコミッティ制作・著作)

各分野のDVDは、日本語、英語、韓国語、中国語の4ヶ国語に翻訳をいたしまして、それぞれの言葉で、聞いていただけるようになっています。このビデオは、フリーで提供しています。

西風社会

さて、今ごらんいただいた大阪のモノづくりの伝統は、どうして出来たのでしょうか。実は、かつて河内鑄物師(かわちいもじ)という集団がおりまして、平安時代から鎌倉時代にかけて、全国のお寺の鐘を鑄造したり、鋤、鋤といった農器具から、鍋、釜にいたるまで全国に供給していたのです。

ではさらにその伝統はどこから来たのでしょうか。その訳は地理にあります。

古代この辺りは、海でした。よい港がありどんどん大陸から先進文明が入ってくる。なぜかといいますと日本では風が西から東へ吹いている。これがキイです。つまり、地球の自転に伴って、偏西風が西から東へ、吹いているため、日本の国は、西風社会にある。なにが起るかといいますと、アジア大陸の人たちが、船に乗るとこの風に乗って、日本列島に漂着することができる。太平洋側に出ると、風に押されて、大海原に飛ばされてしまいます。

昔は舟運船運で、人は行き来していましたので、交通の大動脈は、日本海側でした。

大陸から到着するところが、北九州であったり山陰であったりするのですが、そこから日本の中央部へ進もうとすると、瀬戸内海に入ってきます。関門海峡から入ってきますと、静かな内海です。風も、嵐もそんなにきつくない内海ですが、じつは海流が、滔々と音を立てて流れているのです。豊後水道と紀伊水道から、干満のときに、ものすごい勢いで水が押し寄せたり、引いていったりするのです。満ち潮のときに、音を立てて、瀬戸内海に豊後水道から水が流れ込んでくる。この時、関門海峡に入ってきた船は、それに乗るとたちまち瀬戸内海の真ん中ぐらいまで到着する。

苦労せずに到着できる。広島と岡山の間に「鞆の浦」というところがあります。この鞆の浦辺りまで、上げ潮に乗ってやってくるわけです。そこで潮待ちをしていると、今度は引き潮になります。

引き潮になりますと、紀伊水道から流れ出ていく水が、大阪に向かって流れますから、この引き潮に乗ると労せずして、着くところが大阪湾なのです。

必然的に大阪湾が巡り合いと交差、集積の場になる。これが大阪の始まりです。国生み神話の舞台は明らかに大阪湾です。西風社会のなかでの瀬戸内海の潮流こそが大阪湾に日本の文化文明の中心地たる宿命を与えたというのが、私の説です。

その行き着いたところの大阪で、最初に国づくりをした人は、誰かという、これはやはり仁徳天皇だと思います。いまから1500数十年前の人です。この人が、いま、われわれが大川、土佐堀川と呼んでいる中之島周辺を掘削しまして、生駒山との間に水が貯まって湖になっていたのを切り開いて、西側の難波の海に流した。これは大土木工事でした。大土木工事をやるだけの技術集団がそのときいた、たぶん、鉄の土木機械が、そのころに入ってきて大規模工事ができるようになった、大量の土砂を動かすことができるようになった、つまり国家レベルの公共工事が、本格的に行われた、それがゆえに、仁徳天皇陵という巨大なエジプトのクフ王のピラミッド、秦の始皇帝陵に匹敵する世界3大陵墓といわれる大きな土木工事をを行うことができた。そして河内湖が干上がっていくと、膨大な水田が生まれますから、その水田で、みんな、農作業をして、民の竈は賑わいにけりと言うお話になったのでしょう。

じつは、その土木機具づくりの伝統がずっと、大阪にモノづくりの伝統として、受け継がれて来たと思います。堺を中心に、いまでも自転車とか、刃物とかのモノづくりが、さかんです。

河内鑄物師という集団も長い、1500年ぐらいの流れの中で理解すべきでしょう。

大大阪時代

大阪が初めてで、大阪が出発のビジネス、モノづくりは数限りなくあります。

大阪は、発初企業の大拠点です。商業では、江戸時代に淀屋が、先物取引を始めた。シカゴより、はるかに早かった。

じつは江戸時代、大阪は天下の台所と言われたのですが、これは惨憺たる結果に終わりました。たび重なる御用金取立て、大名への貸し倒れ、貸付返済不能などで大阪商人は疲弊し明治を迎える頃は経済的には焼け野原同然でした。

殆どゼロからの出発でしたが、また盛り返して行きました。まずは紡績業、河内木綿を材料とする紡績工場を堺につくった。やがてイギリスから紡織機を輸入し、毛足の長い綿花をアジアから輸入して、綿布、綿糸をつくって、またアジアに輸出していくということで発展し、輸出入商社が立ち上がり、東洋のマンチェスターといわれるようになりました。日清戦争、日露戦争といった対アジア戦略の拠点でもありました。鉄鋼業、造船も大阪で始まりました。日本最初の捕鯨船も大阪でつくられています。ただ、遺憾ながら大きな船をつくれな。進水式をやるためには、深い海が必要なので、やがて呉とか、佐世保のほうに移っていくのです。

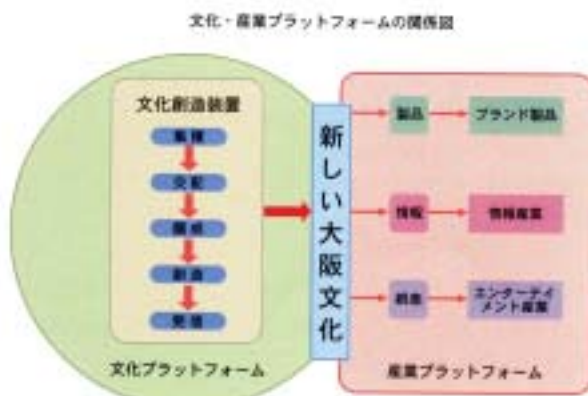
1923年、大正12年に関東大震災が起こり、多くの人が関東から大阪にやってきます。防災の必要が叫ばれ、大規模な大阪の都市計画が実行されます。そして大阪は、人口も、面積も、日本一の都市になるわけです。これを称して大大阪時代と言いまして、大正から、昭和の初期にかけていわゆる大阪発初企業が次々に出ます。例えばサントリーが、日本最初のウイスキーを醸造するとか、国産ラジオ第一号が出てくるとか。南海電鉄は日本最初の民間鉄道で、これは明治時代なんです、そのあと小林一三さんが現われて宝塚歌劇団をつくり、ターミナル・デパートという大発明をする。一番象徴的な事業が御堂筋です。関一（はじめ）市長さんの時代、関さんは東京から招かれた人ですが、招いた人は、池上四郎というその前の市長です。会津の白虎隊の生き残りの人で、警視庁に入り、のち大阪府警本部長をやっているうちに、招かれて大阪市長になったのです。そして都市計画の専門家の関一教授を大阪に招いて助役にし、やがて、関さんは市長になり御堂筋を開発した。御堂

筋こそ、大阪の誇るべき、世界でも例のない大都市計画を実現したストリートだと私は思います。大阪城天守閣が市民募金で再建され、綿業会館とか、いまでも残る名建築といわれるものは、殆どこの時代に生まれています。

産業プラットフォーム

発初ビジネスでは戦後にも、例えば駅の自動改札機だとか、スーパーマーケット、カッターナイフ、チキンラーメンなど、様々な発初企業が生まれました。これを、さっき申し上げましたコア・アイデンティティの関係で、少し、眺めてみますと、下のような図になるのではないかとということで文化産業プラットフォームの関係図をご覧ください。

(図1)



新しいいろんな情報とか、人、投資が集まって交流する。PREXも交流を重視しておられますが、その交流が集積し交配され、刺激をお互いに受ける。それが醸し出され、お酒のように醸成されていく。そのことによって、創造が生まれる。創造されたものが、発信されていく。この創造装置のプラットフォームこそが大阪ではないか。これこそが大阪の本質ではないかというのが、われわれ3年間勉強した結論なわけです。

大阪というのは、もう一回整理しますと、地理的優

位性、それは、たまたま西風社会のなかで、日本列島の中央に位置し、瀬戸内海という天然の大駆動装置に乗って、船や人やモノが集まってきて、交流が生まれて、集積し、刺激しあって、創造が生まれてモノづくりへと発展していった。このように解釈しても、よろしいのではないかと思います。

さらになぜ、日本人が、モノづくりで世界に冠たる地位を築いたか、これは私の意見ですが、2つ思い浮かぶわけです。一つは日本の四季、移ろう四季のなかで生きている日本人に非常に繊細な感覚が育まれた。繊細な感覚が、繊細なモノづくりに生きる。ナノ・テクノロジーも日本人の特性が、生きています。

二つ目は、四季の移り変わりのなかで、日本が農業を長年、営んできた。その農業ゆえの律義さです。1日間違えと、台風が来るかもしれない。そうすると稲が倒れ、収穫が減る。やるとなったら、今日やる。私はアメリカに、ちょっと住んでいましたが、びっくりしたのは、午後5時になったらアメリカ人は「マイ タイム イズ オーバー グッバイ」と帰る。オイオイ、仕事が残っているのにといっても「アイ ドント ケア」とか言って帰る。これは日本人には信じられない。日本人の責任感、今日やることは、今日、やってしまわないと、気が落ち着かない。この辺が、私は農民の細やかな作業から培われた日本人の感性だと思います。四季の移り変わりによって、養われた繊細さと相まって、日本のモノづくりの特性をなしている。その上に大阪のイノベーティブな創造的風土が加わって、重層的な大阪のポテンシャルが生まれて、今日に至っている。もちろん栄枯盛衰がありますが、というふうに思います。

ものづくりは人づくり

中部経済同友会の方々とお話をする機会が去年ありました。そこで私は、トヨタをはじめ、素晴らしいモノづくりを愛知県、あるいは中部地方で行われるのは、恐らくは三河人気質に養われた律義な、きっちりした精神がモノづくりに生きているのだでしょうと、お聞きしましたら「まさに、その通りであります。私たちもモノづくりの原点は、そこだと思っておりますが、非常に、いま心配していることがあります。それは、いつまで、こ

れがつづくかということです。というのは、自動車というのは、膨大な部品の集積によって、一つの自動車が生まれる。しかしながら、一つの部品が故障すると、とたんに何万という部品の集積である自動車の品質全体が疑われる。従って、一つの部品といえど、おろそかにはできない。しかし、それは自分たちの自社製ではなくて、いわゆる系列とか、お取引下請け企業様が、つくっていただく。ということで、私たちは常に下請け、孫請け企業を、絶えずウォッチしてまわっているのです。そのときに共通点があります。それは優秀企業は、社長がしっかりしている。次に従業員がしっかりしている。ビジョン、ミッション、パッションの三つを共有している従業員と社長がいる。だからこそのいい部品をつくれる。

しかしそんなことは当たり前です。じつは、われわれがウォッチしているのは、後継者です。果して、この会社は10年後も、そういう形でいけるだろうか。10年先、われわれがお取引引きする企業は、いまの取引企業の何%でしょうか。恐らく半分かもしれない」と言っていました。

10年で半分は入れ替わる、それは後継者の問題だということです。私は、なるほど、モノづくりは、人づくりなんだということを、そこで教えられました。

去年はニセモノが、キーワードになった年で、次々に偽造、偽装が生まれてくる。ほんとうは、日本は、こういうことが起こらない国だったはずです。しかも老舗で、よもやと思うところが起こす。なぜか、というところはもう後継者の問題です。つまり人づくりの問題です。

今日の新聞にも、中国からやってきた殺虫剤入り餃子が、トップ記事に踊っておりました。じつは思い当たることは中国を旅行して帰ってきた方が、「これは大丈夫か？中国がこのまま走って、拝金主義が膨張していったときに、どうなるか、恐ろしくなって帰ってきました」という話を聞きました。豊かになった先には、バラ色の夢がある。人間は幸せになる。そう思って、走って拝金主義が膨張していく。とどめを知らない。これは非常に危険なことなのです。じつは大阪の歴史のなかにもちゃんと教訓があるのです。

商都と精神文化

大阪は仁徳天皇以来の1500年の歴史があります。大阪の城下町としての町割りをつくったのは豊臣秀吉です。しかし豊臣の天下は、長くつづかず、取って変わったのは徳川です。徳川家康は、征夷大將軍として江戸に幕府を開きましたが、依然、豊臣家の幕閣の一人、つまり家来だったわけです。なんとか豊臣家を叩き潰して、名実ともに日本の覇権を確立しなければいけない。これは、だれでもその立場に立てば思う事でしょう。

そして大阪冬の陣、夏の陣で、大阪城を炎上させます。無理難題を吹かけられ、策略渦巻くなかで、豊臣秀頼、淀殿が自害するわけです。

その後も、豊臣恩顧の大名が再び力を持たないように、大阪の町は、武士を置かず、商売オンリーの町に誘導します。

その代わり、地子銀を免除する。つまり固定資産税を免除したのです。大阪の町人は、大喜びで「これからは経済発展の時代だ。そのお礼に鐘を铸造しよう」ということで、徳川の恩を忘れないように、時の鐘をつくります。

住友倶楽部の横の釣鐘町に、いまでもこの鐘があります。

さて、江戸では、徳川が幕府を開いたものの、もともと一漁村に過ぎなかったところ。そこへ大量の侍が集まってきました。徳川の旗本だけで8万騎、そこへ、全国から参勤交代で侍がやってきます。侍屋敷が要りますから、大工さんも、職人さんも集まってくる。みんな男です。男ばかり集まって急速に百万都市に向って、膨張していきます。消費財供給地はまわりどこにもない。よって大阪を経済都市に誘導して、江戸消費市場へせせとモノを運ばせるわけです。そのために太平洋航路を河村瑞賢に命じて開発させた。近畿地方には手工業生産地帯がありますから、大阪は物産や工業品などの供給市場となりました。私はこの実態を植民地と言っています。江戸は大阪を植民地化した。それで全国からモノを大阪へ集めて、中央市場で取引して、江戸へ運ぶ。たしかに大阪は繁栄する。天下の台所で、この経済繁栄自体は、

悪いことではないのです。「天下の富の七分は浪花にあり、そのまた七分は、舟中にあり」と謳われた繁栄でしたが、じつはこれは非常に危険なことでした。経済的繁栄は、しばしば精神の劣化を伴うからです。

もちろん文化も爛熟いたしました。近松門左衛門が、様々なシェイクスピアにも擬せられるような戯曲を多く書いたり演劇が盛んになりました。

しかし江戸時代には身分制度があり士農工商と順番をつけられていました。偉いのは侍であり江戸は侍の町だから、偉い。商業の町、大阪を下に見る、見下ろした存在であるという位置付とキャンペーンが行われました。270年間にわたる大キャンペーンです。先程、誰か日本人が大阪の悪口を言っているという話をしましたが、どうも私は、この構図がどこかにまだ、生きているのではないかと言う気がします。

荻生徂徠は、商人は不定なる渡世をするもにて、つぶることを、かつてかもうまじく。潰したっていいのだと唱えています。

江戸後期には、中央市場機能が江戸にも出来まして、大阪は低落軌道に入ります。のみならず御用金という形で、財政の借金を江戸からの申し付けにより、大阪町人が全部背負うのです。大名への貸付も不良債権化し不渡りになりました。にもかかわらず、林子平にいたっては「町人と申し候は、ただ庶民の禄を吸い取り、他に益なく無用のごく潰しにこれあり」と堂々と述べています。

これが天下の台所の実態であり結末です。しかもこれについては、商都に甘んじた大阪商人自らが、モノが栄えて心が滅ぶ状況を招いた一面もあったのです。

石田梅岩

これに対して、石田梅岩という人が、「商人と屏風は、すぐには立たず。商人は二重の利を取り、甘き毒を喰ひ、自ら死するようなことをやっているじゃないか」。これではいけないと立ち上がったのです。石田梅岩は亀岡の人ですが、のちに京都に出まして、呉服屋の番頭さんをやりながらいろいろ勉強をいたしまして、ある結論に達し、これを辻立ちしてでも訴えて

いこうと、まず辻説法を始めます。石田梅岩が始めたので、石門心学といわれ全国に広がっていきます。商人が二重の利、密密のカネを取るのには、結局家をつぶす行いで不孝者だと彼は説きます。

淀屋が典型的な例です。天才的な先物取引を始めた淀屋が、巨万の富を築きます。いまでも淀屋橋が残っていて、碑が立っています。一代目、2代目は、よくやりましたが、三代目、四代目になるとおかしくなってしまうと、四代目でお取り潰しになるのです。処払い、大阪から追放になり全財産没収。これは結構、裏があると私は思いますが、資料が残っていないのでわからない。わからないと言う事自体謎ですが、やはり一方において、淀屋にもお金持ちになったためのおごりがあり、贅沢三昧をやってつけこまれる隙を与えたようです。

天井にガラスを張って、金魚を泳がせたといいますが、驕りがあったのでしょう。だから古来、剣によって立つものは、剣によって滅ぶ。富によって立つものは、己のおごりによって滅ぶといわれる、まったくその通りの例です。かくてはならじと立ち上がったのが、石田梅岩やあとで述べる懷徳堂の人たちです。

「商人にも道がある。商人の道を知らざるものは、むさぼることを務めて、家を滅ぼす」。だから商人の道を勉強しなければいけない。「士農工商とあるけれど、侍が偉くて商人が一番下だと、上から下を見下ろすのはおかしい。みんな社会のために、それぞれの役割を果たしているだけだ。社会のために貢献しているので、天に二つの道はない。社会貢献に二つの道があるわけではない。商人の儲けは武士の俸禄と同じである」。こうして石田梅岩は1700年代初頭の人ですが、はからずも資本主義発展の原理を掘り当てています。

「真の商人は、先も立ち、我も立つことを思うものだ」。

先様、お客様の利益があり、しかるのち自分もそのことによって、利益をもらえる。だから利益のために働くのではなく、お客のために働くことによって、自分も結果として利益を得るのだ、つまり他利と利己の調和を説くわけです。「ほんとうの富の主は、天下の人々にある」己だけが金儲けをしようと、拝金主義になると、

必ず自分が滅ぶ。そして、自分に、それを受け渡してくれた先祖を裏切ることになる。石田梅岩は京都から、たびたび大阪へ来てこうした講義を行い、大阪にもいくつかの心学講舎ができました。

懷徳堂

同じく1700年代初頭、ちょうど江戸バブルが弾けたころですが、懷徳堂が大阪で設立されました。これは社長とか、専務の教育機関です。五同志といわれるオーナーが、おカネを出してはじまりました。

これはCGによって、再現された姿です。

(再現図) CG によって再現された懷徳堂
玄関



講堂



(出典 ブランドサミット報告書より)

そこから有名な学者が、輩出しました。中井竹山、山片蟠桃、草間直方などです。高度な、当時として世界的にトップレベルの勉強をしました。哲学が基礎にありますが、天文学、生物学、医学などあらゆる学問を自由にやった。その人たちも梅岩と同じく「商人

の利は、士の知行、農の作徳なり。仁義をするもの、人のため、社会のために行動するものは、利益を目的とするのではないが、おのずから利が付いてくるのだ」と言っています。

じつは、韓国のKBS放送が去年取材に来ています。経済発展を遂げた韓国では、後継者教育がいま一番大事だということで、儒教とか、心学などの特集を放送しました。

懷徳堂で、唱えられた言葉に、「人の大切な宝は、一つ一つの善を積み重ねていくことである。人はおカネのために生きるのではなく、社会のために尽くし、一心の善を積み重ねるところに人が生きていく理由がある」と言っています。従って「人としての道を知らなければ、人間として、生きる理由がない」わけです。そのために、これは懷徳堂の正面に竹を削って書いてあったのですが、「学を力めて以って己を修め、言を立てて、以って人を治む」。自分を高め、人に訴えて、行動にも移して社会のために尽くそうということです。

この懷徳堂の先生が、弟子を育て、弟子が弟子を生み、やがて幕末に適塾を開いた緒方洪庵につながります。緒方洪庵が書いた有名な医師たるものの心得があります。ベルリン大学のフーフエランド教授の言葉の翻訳ですが「医のために生活する者は、人のためのみ、己のためにあらず。ただ、己を捨てて、人を救わんことこそ、人の生きる道なり」。ここに私は、大阪の精神的伝統に触れる思いがします。懷徳堂、石門心学以来の精神的伝統のなかで、こういう言葉が出てくるのではないか、ということです。

こうした蓄積の上にたって、医薬品生産金額は、いま大阪がトップであり、バイオ・クラスターが北摂に、生まれつつあるということを考えたときに、やはり、歴史の鉱脈、歴史の水脈というものを、絶えず汲み上げていくということが、いかに次の時代を開くのに大切であるかわかってくるのです。

プロテスタント

カトリックが中世を支配しておりましたヨーロッパで、人は何によって救われるかは重大問題でした。宗教改革が起こり、それまで教会で懺悔したら救われると

思っていたけれど、そうじゃない。プロテスタントと言われる人たちは、職業、それぞれに与えられている職業こそが神様から与えられた使命であると考えました。職業に一生懸命働くことが、神に救われる道だということです。このプロテスタントが、メイフラワー号に乗って、アメリカ大陸にやってきました。アメリカ発展の典型的な体現者として、言われているのが、ベンジャミン・フランクリンです。

年代を見ると、ちょうど石田梅岩や懷徳堂がいたころと時を同じくしています。面白いことに、日本で彼らが言っていることと、殆ど同じことをフランクリンが言っています。「勤勉であれ、探究心を持て、合理的であれ、社会に尽くせ」。土農工商の制度のなかで何くそと思って大阪や京都の商人が考えたことと、図らずも洋の東西で同じく、アメリカのプロテスタントが、資本主義発展の原動力となった生き方をしていたのです。禁欲的職業労働によって、その実践を通して、神の栄光を地上に導く。これによってあなたは救われる。のちに、マックス・ウェバーが有名な論文を書いたように、資本主義が今日、発展してきたのには、こうしたプロテスタンティズムの倫理があるという訳です。

人間は不完全な動物ですから欲望で暴走する。ブレーキとアクセルの両方が人間の心には必要だと、つくづく思い当たるわけです。

そのブレーキがヨーロッパの場合には、神からの使命感であり、日本の場合には、社会貢献、人間が天の一物として自然と共生して働くという気持ちではないのか。それがいま言うところの、CSRとか、コンプライアンスにつながると思います。

天を知る

ニートという言葉が生まれていますが、人は何のために働くのか、ということは重要なテーマです。大阪の商家の家訓社訓にはその思想が組み込まれています。

「先義後利」先に社会的義務を果たして、のち利益がついてくる。

「徳義は本なり、財は末なり」財のために働くのではない。徳義がほんとうなのだ。

「三方よし」これは近江商人が、売り手よし、買い手

よし、世間よしと心がけるように後継者に遺言として残した言葉です。

さっきの緒方洪庵の弟子に福沢諭吉、大村益次郎、橋本佐内など近代日本を形成した大人脈があります。その福沢諭吉の文明論など読んでみますと、衣食を豊かにするという欲望を満たすだけでは人間は獣と同じで、人間の人間たる理由は、いかに社会のために、あるいは己の心を高尚にしていくかにある、と言っています。これも1700年代からの長い精神的地下水脈のなかで理解することができるのではないかと思います。

石田梅岩の言葉ですが、「心を尽くして、性をしり、性を知れば、天を知る」。これは幸せになるためには、心を磨いて、自然に従って共生することこそが、天を知る道なんだというようにとれます。

日本人は世界のなかでも自然を愛する気持ちが強く、自然との共生で生きてきた民族です。それがものづくりの基本にあると、さきほど述べました。

いま世界も地球の温暖化など、環境問題への対応、生態系の調和がないと、経済も社会も健全に発展しないとされておりま。

日本人には、先ほどのモノづくりに生きている日本人の心、あるいは大阪の商人が図らずも、掘りあてた自然と共生のなかで、天の心を知り、商売をやっていこうという生き方、お陰さんとか、お天道さんとか、ありがとうとか、ご飯を食べるときに、いただきますとか、勿体ないとか、こうした精神があります。

じつは、これから日本が、世界一と言われている環境とか、エネルギー技術、あるいは先ほど言いましたナノ・テクノロジーを駆使して、生態系との調和、地球を壊さない繁栄へ貢献する日本人の最大のポテンシャルが、ここにあるのではないかと思います。

最後に、大阪について、1500年のスパンで眺めてみると、大阪の繁栄は必ずアジアと関係があった。別の言葉でいえば、日本の国家的課題がアジアに向かったときに、大阪は繁栄した。第一期、古代浪速の津の時代、それから大航海時代、黄金の時代が堺を中心に生まれた。そして第三期、大大阪時代、明治から大正にかけて政府の最大の課題は、アジア、

ユーラシア戦略でした。そしていま第四期、日米貿易を対アジア貿易が超えて日本海が再び、運送の大動脈という時代を迎えました。比較優位性が再び、大阪に巡ってきたのかなというのが、文明のサイクルとしても見とれるわけです。それを、どう生かしていくのか。アジアの時代の大阪の発展に思いを馳せて、とりあえず、私の話を終わらせていただきます。

司 会 どうもありがとうございました。それではご質問がありましたら、お受けしたいと思います。

参加者 1

感想めいたことを少し。お話を伺ってしまして、2つあります。

まず、1つは、われわれ関西にいて、一番意識せざるを得ないのが、東京です。東京が、東京の中央政府と言いますか、東京のいろんな大企業が、いまの堀井理事長のようなお話、いわば先義後利のようなお話を果して、するんだろうかな言うのが1つ。もう1つは、きょうのような話ですが、当時の儒教倫理が徹底していたと言いますか、日本の一元的な社会、それからアジアと言ったときも、例えば中国や韓国といったように儒教文化の強いところを意識してのアジア、そして日本ということであれば、非常に、いまのような先義後利と言った商業倫理というようなのに共感できるわけですが、例えばいまの時代、私も、じつは海外、4カ国、2年以上ずつ、在外勤務なんかして来ますと、そう簡単にアジアと言っても、それから世界と言っても、グローバルな世界を考えた場合に、いまの、この非常に倫理的な商業倫理と言いますか、倫理的な生き方というので、果たして世界で生き残っていけるのかなと、非常に、そんなことが不安に思われました。

堀井理事長

東京の方が、こういう話を聞いて、どう思うかというのは、私はわかりません。わかりませんが、あまり、われわれは東京のことを意識する必要もない。大阪は、大阪としてのアイデンティティとポテンシャルを掘り下げていくなかで、独自性を主張すればいいんじゃない

いか。われわれは世界とダイレクトに、大阪、関西を結びつけ、われわれの論理を独自に構築していけばいいと思います。

2点目、ハンチントンが、「文明の衝突」でいうところの8大文明、そのなかの1つに、日本文明を独特の文明として明確に位置付けています。他の文明とは違うのです。われわれは、他の文明が衝突する時代にあっても、日本文明というものを広めていくという使命感を持つべきだと思うのです。人に合わせるのではなくて、使命感を持って世界に貢献していく。それこそが日本文明の、先ほど言いました他の国にない特質なのではないかなと思います。私も外国に住んでみて強烈な生存競争の世界を垣間見っていますが、力づくで対抗しようとあせっても所詮日本人は、あそこまでアコギにはなれません。むしろ毅然たる「徳で生きる国家」と名乗れば信用もされ尊敬されると思います。もちろん生き馬の目を抜くような世界で油断は禁物ですが。

これは外務省関係の方に伺ったんですが、じつは日本は、ものすごく憧れの国となっている、それは日本が戦争していない、ここ50年戦争をしなかった、それから非常に高い生活水準を達成している、そして独自の日本文化を持っている、だから日本に対する憧れのような、そして親近感のようなものがきわめて強いと言うんです。ですから私は自信を持って、いわゆる日本文明、日本文明というのは、さっき言った勿体ないとか、お陰さんでとか、自然との共生とかありますが、環境技術でもあり、同時に人と仲良くする共生、停電しないとか、病気にならないとか、長生きできるとか、医療システムがきちっとあるとかはたいへんな文明です。曾野綾子さんが言っておられますが、ダイヤルして、救急車が飛んできて、おカネを持っていたも、持っていなくても運んでくれる国が、どれだけあるかということです。これこそが私は文明だと思います。

そうした日本文明のシステムをつくりあげたということ、われわれは誇りを持って世界に言っていくべきじゃないか、かつてアメリカが、アメリカンウェー オブ ライフを、人類最高のライフスタイルとして打ち出してきましたが、もう破綻をしています。これからはジャパンウェー オブ ライフが行く番ではないかと私は思

っています。

参加者 2

大阪が、いい精神文明を持っているなと感銘を受けました。でも、外から見てみると、大阪というのは、なんだろうかと、いまでもわかりません。ただ、おっしゃったなかで、これは面白い切り口になるかなと思ったのは、その精神を生かして、いま日本の経営者団体も、みんな環境問題の総量規制、反対されておられますね。大阪発で、やられたら、非常にインパクトがある。大阪発で環境を一番に名乗りをあげられる。それを実現することによって、利は先にありで、環境技術で大阪を生かせるんじゃないかと。ものすごく単純な発想なんです。大阪の経営者団体から声をあげられたら、すごいことが起こるのではないかと思います。

堀井理事長

きょうは井上会長もおられるし、会場には関西経済同友会の萩尾さんも来ておられますから、お願いしたいと思います。